

ニイ
ガタ

安吾賞 2016

高橋治儀

土に夢を植える—高儀農場

挑戦する農業

第1回授賞式

安吾賞とは、生きざま賞である



2/26 2017 <日>

新潟三越 7 階特設会場

新潟市中央区
西堀通 5 番町 866 番地

<入場無料・申込不要>

- 10:00 開場
- 10:30 授賞式
- 11:20～17:00 記念マルシェ
フルーツマト・越後姫・ハム・ベーコン
ウインナー・各種スイーツ・高儀情熱米 ほか
*売り切れ次第終了

写真：林忠彦

問い合わせ先：
新潟市文化政策課
TEL.025-226-2563

ニイ ガタ 安 吾 賞 2016



安吾賞とは、生きざま賞である

第1回 ニイガタ安吾賞 高橋 治 儀

(たかはし・はるよし) 昭和28年・新潟市生まれ。
高儀農場代表取締役 新潟市北区新崎 2757

高橋治儀氏は、昭和60年ごろからトマトの節水栽培に取り組み始めましたが、販売を開始すると、フルーツトマトはなかなか市場に認知されず、苦戦を強いられました。しかし諦めずに販売ルートを探し続けたことにより、長野のスーパーに出荷できるようになり、口コミで販路を広げることも成功しました。

平成12年には全国に先駆け「産地直食」のレストラン「ラ・トラットリア・エストルト」を開業。農地法上の問題から一時休業するも、その後、新潟市が農業分野での国家戦略特区に認定されたことを契機に、再び農地でのレストラン経営に挑み、新「ラ・トラットリア・エストルト」をオープンしました。

様々な困難に直面しつつもそれを乗り越え、多くの人が成しえなかった農業の新しい道を切り開いているパイオニアとしての姿は、

【反骨と飽くなき挑戦者魂の安吾精神を発揮する】

【日本人に大いなる勇気と元気を与える】

【明日への指針を指し示すことで現代の世相に喝を入れる】とする賞の趣旨に合致し、まさに「現代の安吾」としてふさわしいと評価されました。

本人コメント

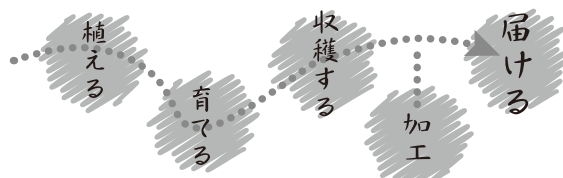
この度、第一回「ニイガタ安吾賞」の受賞のお話をいただき、「えっ？私が!?なんで?」と大変驚きました。

偉大な受賞者の皆さまの顔ぶれを思い出し、「どうして、私が?」と伺ったところ、私の農業に対する取り組み方・生き方が「挑戦者魂」、「現代の世相に喝を入れる」など、安吾的であると認めていただけたとのこと。

私はこれまで賞と名のつくものには、全く縁がありませんでした。私が新しい挑戦をすることにより、周りの人たちを振り回し、若いころは親にたしなめられ、妻にはくどかれ、老いては子どもたちに叱られながら、今日に至っております。私の生き方が少しは評価されたこと、それに何よりも農業の分野から選んで頂けたことは、大変嬉しく思います。



産地直食・農家レストラン
ラ・トラットリア エストルト



「作って、届ける…」
このシンプルな夢に
なぜか強固な壁があった!



坂口安吾年譜



生誕 明治39年(1906)10月20日、新潟市に生まれる。学校に馴染めず、ひとり日本海に面する浜辺に寝ころんで思索した。荒蕪たる風と日本海の風景は安吾文学の原風景といえる。

余は偉大なる落伍者となっていくのか歴史の中によみがえるであろう 大正11年、落第が決定的となり東京の豊山中学校3年に編入。この時、新潟中学校の机のふたに「余は偉大なる落伍者となっていくのか歴史の中によみがえるであろう」と彫ったという。卒業後、下北沢の分教場の代用教員となり自然の中に悪童たちと遊んだ。この頃から求道の厳しさに対する憧れが強まる。

求道者、安吾 大正15年、東洋大学印度哲学倫理学科に入学。悟りを開くため多くの哲学宗教書を読破、睡眠4時間という厳しい修行生活を1年半続

け神経衰弱に陥ったが、それを梵語、パリ語、チベット語、フランス語、ラテン語などを猛然と勉強することにより克服した。

文壇デビュー 昭和6年、『木枯の酒倉から』、『ふるさとに寄る讃歌』、『風博士』を発表、文壇デビューを果たす。失恋の痛手を克服する決意のもと執筆した長編『吹雪物語』は酷評され、安吾は自分に絶望し、転居を繰り返し自らを孤独の淵に置きながら、どん底の淪落の生活を送る。しかし『紫大納言』(S15)、『木々の精、谷の精』(S15)などの新境地をひらく。

小菅刑務所・ドライアイス工場・軍艦に会いたす必然の美 昭和17年、国粋主義の時代、大胆な『日本文化私観』を発表し、伝統文化を鵜呑みにすることの欺瞞を指摘した。

堕ち切ることに真実の救いを発見せよ 昭和21年、敗戦後の昏迷の中でいち早く戦後の本

質を洞察し、4月『墮落論』、6月に『白痴』を発表。この2編は、若者を中心に戦後虚脱していた日本人に強い衝撃を与えた。戦前戦中の倫理観を捨て新たな生き方を指し示す革命的宣言は希望の書となり、『墮落論』によって戦後の日本が再スタートした。昭和22年『風と光と二十の私と』、『桜の森の満開の下』、『不連続殺人事件』、『青鬼の禪を洗う女』を発表。**戦う安吾** 昭和25年、『安吾巷談』を連載し、戦後のタブーに挑戦する。昭和26年国税局と税金滞納、差押えをめぐって『負けラレマセン勝ツマデハ』を発表。税金闘争をひとり戦い抜き、同年9月には競輪不正事件で自転車振興会を相手どり戦う。『夜長姫と耳男』(S27)発表。

急逝 昭和30年(1955)2月17日、古代史の雄大な構想とともに、原風景に由来する創造活動に意欲を燃やしはじめた矢先に、桐生の自宅で脳溢血で急逝した。享年48。